

## 努力事項解説 その2 (小学校音楽)

「児童が、音楽を形づくっている要素を聴き取り、  
音楽のよさや美しさと結び付けて感じ取ることができるような  
授業の展開を構想する。」の実践のポイントを考えていきます。  
今回は3年生の「ひびけ歌声」のポイントです。

### ○ 第3学年 題材「ひびけ歌声」の場合

この題材では、中学年の学習内容の「(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を指導する。」の、「ア 範唱を聴いたり、八長調の楽譜を見たりして歌うこと。」「イ 歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図を持って歌うこと。」を、共通事項の「旋律」「拍の流れ」「音階や調」「強弱」「用語（様々な音符や休符）等」と関連させて指導するようになります。

#### (1) 『この山光る』のポイント

教科書では、

- ① 拍の流れにのり、旋律の感じを生かして歌う。
- ② A-B-B'という「三部形式」の感じを生かして歌う。
- ③ 「ホラヒ」というヨーデルの部分の声の出し方に気を付けさせる。

この3つをねらいとしています。この3つのねらいを達成するには、次のような方法が考えられます。

アとイ・ウの旋律は、明らかに雰囲気の違いがあります。アは、八分音符が多く細かい音の動きがありますので、ひとつひとつの音をはっきりと歯切れよく歌うと生き生きとした旋律の感じをだすことができます。イ・ウの旋律は、四分音符が多く二分音符も使われていますので、レガートで歌うとゆったりとした旋律の感じを出すことができます。ここで大切なのは、アとイ・ウは対照的な雰囲気の違いだということです。それを児童に気付かせ、どのように歌ったらそれぞれの旋律のよさを表すことができるか、範唱を聴いたり、先生が特徴を大げさに表現したりして児童に気付かせるようにしていきましょう。

③については、力を入れずに歌うこと、教科書にあるように「遠くに呼びかけるように歌ってみよう。」など、無理のない範囲で声の出し方に意識を向けさせるようにしましょう。

なお、3年生から「八長調の楽譜を見たりして歌うこと。」という指導事項が入ってきます。いわゆる「視唱」です。これについては、児童の負担にならないように、楽曲の一部のみ、歌いやすい部分だけ取り出して挑戦してみるという方法で取り組ませ、できたときには大げさに賞賛し、意欲を持たせていくことが大切です。『この山光る』の場合は、最初の「ドレミファソラ」の順次進行の部分だけでも挑戦させてみるのがいいのではないのでしょうか。

#### (2) 『ドレミの歌』のポイント

教科書では、

- ① 八長調の音階に気を付けて歌う。
- ② イ・ウの部分の強弱に気を付けて歌う。

①については、この曲は特別意識しなくても、歌詞唱することで自然と八長調の階名唱に親しむことができるようになっていきます。幼稚園や保育所ですでに習っているかも知れません。楽しみながら八長調の階名唱に慣れるようにしましょう。

②については、イの部分で、「ドレミファソラシド」の部分でクレッシェンドで、「ドシラソファミレド」をデクレッシェンドで歌い、盛り上がりを作るという歌い方がよく行われています。どのように歌ったらいい感じになるのか、児童に考えさせたり試させたりして表現を工夫させていきましょう。ウの部分は、二部合唱になります。児童の実態に応じて負担にならないように挑戦してみましょう。

※『楽ふとドレミ』『楽ふのお話』について

教科書では、『この山光る』と『ドレミの歌』の間に挟まれています。題材「ひびけ歌声」には含まれていません。扱いとしては、P,9の『楽ふのお話』と合わせて、必要に応じて取り上げるようにすると思います。例えば、ハ長調の視唱をするときに、「音の長さ」、「音の高さ」と楽譜を結び付けて思考する手助けとして『楽ふのお話』や『楽ふとドレミ』を利用することが考えられます。

児童の発達段階や負担を考え、理論的なことばかりにならないように配慮して取り上げるようにしましょう。



次回は、4年生の実践のポイントを考えていきます。8月9日（金）頃アップする予定です。